

## 広島市指定重要有形文化財 東照宮唐門扁額目視調査所見報告書

藤田 敏彰

### 1. 概要

名 称 : 広島市指定重要有形文化財 東照宮唐門扁額  
制作年代 : 慶安元年(子戌十二月吉日・西暦 1648 年)  
法 量 : 110.8 × 81 × 厚さ 11.5cm  
材 質 : 檜材  
調査期間 : 平成 22 年 5 月～ 11 月

広島市指定重要有形文化財東照宮唐門扁額(図1)は、東照宮唐門及び翼廊の保存修理工事に伴い、本学文化財総合研究センターに文化財建造物保存技術協会を介し、科学分析調査のため搬入された。

この扁額は、天台宗座主である二品親王良尚の書込みを元に、長尾山の浮き彫りが施されている。浮き彫り文字の周囲は、平面で緑色の塗料が塗布され、その地面周囲に幅五分程の枠組みがあり、その周囲に幅七分程の青色の彩色が施されている。外枠傾斜部には、雲龍の木彫が施されているが、雲部と龍部は一本ではない。扁額裏面は黒色塗料が塗布されている。

今回の保存修理工事における懸案である、「制作当初の仕上げ」の考察と、「使用された顔料と塗料」の目視調査による所見を報告する。



図1 扁額全景

### 2. 目視調査

#### 2-1) 文字浮き彫り部(図2)

下地は二層あり、蛤や牡蠣などの貝殻から造られた顔料である胡粉下地とは色調が違い、黄白色をした下地によって構成されている。この、黄白色の下地は、砥の粉(主成分は二酸化珪素:  $\text{SiO}_2$ )を体質顔料として用いた膠下地であると考えられる。

その黄白色下地の上に塗布された下塗りは、黒色塗料が塗布され、残留した黒色粉が確認できることから松煙などのカーボン系顔料を混入した塗料であり、その筆致から見て取れる筆速の速さと泡の存在(図3)から、ある程度の粘性を持つ漆が塗布されたとは考えにくく、黒色顔料を膠で展延した彩色ではないかと考察する。

黒色塗膜上に塗布された赤色塗料は、弁柄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) を顔料に用いたと思われるが、朱顔料 (硫化水銀: $\text{HgS}$ ) の可能性も考慮に入れたい。この赤色顔料の展延に漆を用いたか膠であるかは、目視において判別できない。

最終仕上げには、赤色塗膜の上に金箔が押されていたものと観察できるが、これらの仕上げが、当初のものであるとは考え辛い。



図2 長尾山浮彫文字 (山部)



図3 筆致と泡が見て取れる山部

## 2-2) 文字浮き彫り部周囲平面部

檜造り平面に施された下地は、胡粉を膠で展延した下地と思われ、表層部の仕上げは緑青 (水酸化炭酸銅: $\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$ ) の彩色 (図4) であると観察できるが、それらが当初のものであるのかは判断できない。



図4 緑青彩色平面部

## 2-3) 文字浮き彫り部周囲平面部を囲む細粋部 (図5)

浮き彫り文字木彫部と同様の工程が、目視にて確認できることから同時期のものと考察できる。



図5 幅五分程の細粋部

#### 2-4) 細枠部外側青色部 (図6)

胡粉下地の上に、膠によって展延された群青（藍銅鉱： $\text{Cu}_3(\text{CO}_3)_2(\text{OH})_2$ ）が塗布されたものと考察する。



図6 細枠外部群青色部

#### 2-5) 雲龍木彫部

下地は、膠に抹香（檜の灰）<sup>しきみ</sup>を体質顔料として用いた抹香下地であると思われるが、当初の下地である可能性は低い。その根拠として、繊細な仕上げの木彫を、抹香下地の厚塗りで形を曖昧にするとは考えにくく後補であると判断する。この後補と思われる仕上げは、抹香下地・黒色塗料・赤色塗料・金箔の順で構成されており、文字浮き彫り部と類似した工程だが、この雲龍木彫部に関しては、箔押し作業の簡便化を図るため、あえて抹香下地の厚塗りで複雑な細部を埋めたのではないかと推察する。

左側龍部には、薄紫色の色相を感じられ、それが最下層部にあることから当初の彩色であるとも考えられるが、目視による判断はできない。

また、雲木彫部と龍木彫部は、個別に造られた後、和釘（錆が殆ど見られないため和銚製と思われる。）<sup>わぢく</sup>（図7）によって接合されている。和釘を安全に抜き、龍木彫部を取り外すことが可能であれば、その下の雲木彫部に施された当初の仕上げが残されている可能性も考えられる。



図7 和釘拡大図



図8 和釘

## 2-6) 外枠木端部 (図8)

文字浮き彫り部との同時期に同様の仕上げがなされたと考察する。



図9 外枠木端部

## 2-7) 扁額裏面 (図9)

接し合う外枠木端部とは違い、下地・塗膜ともにかなり健全な状態で残されている。紫外線などによる経年劣化をまぬがれことが要因かは、目視では判断が困難であるが、黒漆仕上げであると共に、当初の仕上げである可能性を考えたい。

分析調査によって鉄の応答があれば黒蠟色漆であると同定できるが、鉄の応答がない場合は、松煙などを顔料とした黒漆ではないかと考察する。



図10 扁額裏面

## 3. まとめ

扁額に残された現状の塗膜から目視で確認できる仕上げは、文字浮き彫り部が弁柄塗装の上に金箔仕上げ、文字浮き彫り部周囲平面部が緑青彩色、文字浮き彫り部周囲平面部を囲む細枠部が弁柄塗装の上に金箔仕上げ、細枠部外側青色部が群青彩色、雲龍木彫部が弁柄塗装の上に金箔仕上げ、外枠木端部が弁柄塗装の上に金箔仕上げ、扁額裏面が漆下地の上に黒蠟色漆塗り仕上げであると考察する。

目視による当初仕上げの解析は、幾度かの後補時に当初の塗膜が除去されたと考えられ、推察も困難である。

文化財建造物保存技術協会に提出して頂いた剥離塗膜試料に加え、左側龍の薄紫色部と裏面の黒色塗膜及び下地の科学分析調査の結果に拠る所が大きいと考えられるが、当初の部分が残っていないのであれば顔料及び塗料の同定は難しいと考える。

以上、広島市指定重要有形文化財東照宮唐門扁額目視調査所見として報告する。

### 【参考文献】

- 1) 松本達弥：スペイン国立装飾美術館所蔵「山水人物蒔絵筆筒」平成19年度在外日本古美術保存修復事業修理報告書 発行：独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所
- 2) 北村 繁：ケルン東洋美術館所蔵「雷文鱗文螺鈿提子」平成19年度在外日本古美術保存修復事業修理報告書 発行：独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所